INFORMATION

寺子屋トーク

学級崩壊の背景にあるものは!?

第19回の寺子屋トークは、横川和夫さんをお招きし、「教育・競争から共生へ」と題して開催します。

横川さんは、長年共同通信社記者として、教育問題と学校や家庭から疎外された少年少女の取材を続け、現在も教育ジャーナリストとして活躍されています。

「学級崩壊」「家庭崩壊」「地域崩壊」が深刻な社会問題として取り沙汰されますが、その根底にあるものは「人間関係の喪失」です。親と子、教師と子ども、おとなと子ども、それぞれが豊かな人間関係を築こうとしてきたにもかかわらず、なぜ崩れてしまったのでしょうか。そして、崩れた歪みが子ども社会に大きく影響し、子どもたちは追いつめられています。

今回の寺子屋トークでは、横川さんが取材体験を踏まえて、学校教育の問題点や、子どもの世界を通して、「崩れた原因」「再構築するための手だて」を具体的なエピソードを交えて語っていただきます。

○ゲスト／横川和夫さん（ジャーナリスト）
○コーディネーター／山本健慈さん
（和歌山大学生涯学習教育研究センター長・教授）
○日　時／ 9月15日（水）　14時開始（17時終了予定）
○会　費／会員500円（一般1500円）
○主　催／應典院寺町倶楽部、関西こども文化協会

映画 見えない学校

学びの場としての学校は、建物としての学校の外のいたるところにある……。「見えない学校」は、そんな「もうひとつの教育観」で、全国各地の人々の学びについての思いをとらえたドキュメンタリー映画です。

障害をもつ少女の成長を記録した長編ドキュメンタリー映画「奈緒ちゃん」などで知られる伊勢真一監督の作品。「教えない教育」を実践している平井雷太さんを中心とした私塾ネットワークの人々との出会い、それぞれの教育にめぐる思いを2年半をかけて撮影されています。

この映画は、自分自身と向き合って、言葉の意味や価値などを再発見しながら、生きる喜びに出会う場もまた「もうひとつの学校」ではないか、人と人との見えない関係を見ようとするところに「ほんとうの学校」がある、と語りかけています。應典院協力事業。

○日　時　9月23日（祝）
①10:00～、②14:00～、③18:00～
○料　金
中学生以上　前売り¥1500、当日¥1700
小学生　前売り¥1000、当日¥1200
○問合せ
川井田　TEL06－6320－7393
※應典院でも前売りチケットを販売しています。お気軽にお問い合わせください。

寺町倶楽部協力事業 JOCSフェスティバル

JOCSとは、主にアジアに医療従事者を派遣している民間団体（NGO）です。昨年も行われたこのフェスティバル、今年は「アジアの人々と共に」テーマに開催されます。

アジア・アフリカの歌の合唱やアフリカの太鼓ジェンベ、ゴスペル合唱などの国際色豊かなコンサートを始め、健康カレーと長生きチャイの販売、サリーの着付けなど、多文化にふれるコーナーが満載。

アジアを身近に感じるこのフェスティバル、ぜひ参加してみませんか。

○日　時　9月25日（土）
11:00～16:30
○参加費　前売り1000円
（長生き健康チャイ券付き）
当日券　1000円
○問合せ　JOCS
TEL 06－6359－7277

【新入会員ご紹介】

（1999年8月10日まで）

6月1日以降にご入会いただいた方々です。ありがとうございました。

○一般会員
【大阪府】
千種由美子　茨木市
西尾　浩子　八尾市
○学生会員
【大阪府】
渡辺麻友美　大阪市生野区

サリュ VOL. 15
應典院寺町倶楽部のニューズレター

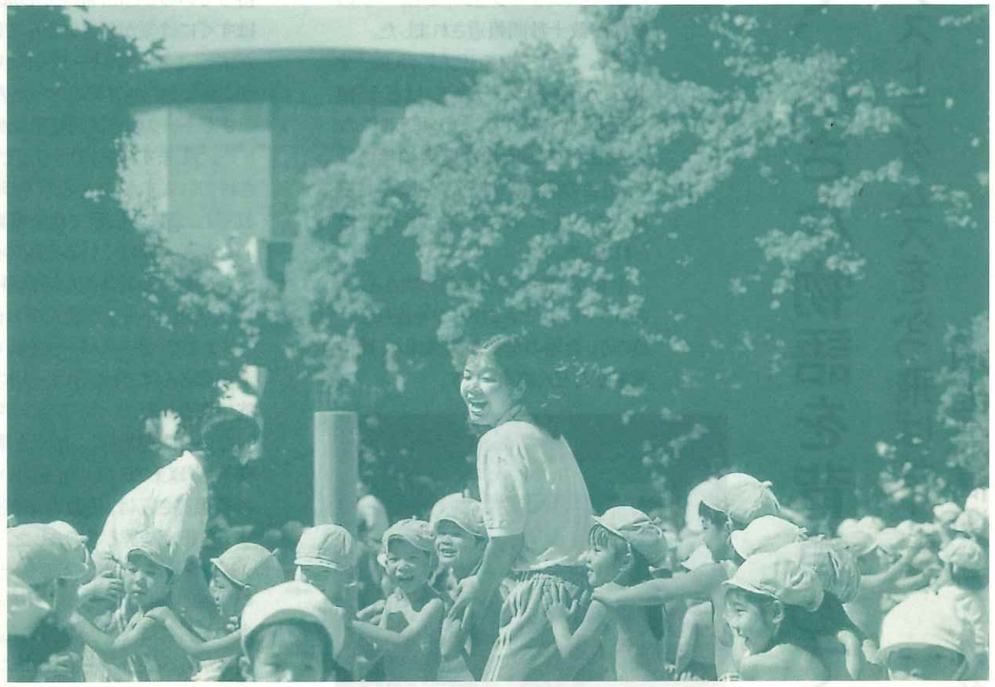
発行日　1999年8月10日
（偶数月発行）
編集人　池野　亮
発行所　應典院寺町倶楽部
〒543－0076
大阪市天王寺区下寺町1－1－27
TEL06－6771－7641
FAX06－6770－3147

應典院寺町倶楽部のニューズレター

Salut

［サリュ］
フランス語で救いの意

1999 AUGUST
vol. 15



季節の中で夏が一番好きな気がする。夏がくるたび、何かいいことが起こる予感がして……。蝉時雨、蛍の輝き、夏の一時を精一杯生きる虫たちにも、生命の大いなる営みを感じた。
それが、夏がただ暑くて、冷房のきいた部屋でだらしなく過ごすだけの季節になってしまったのはいつの頃からだろう。
木陰の子どもたちの歓声を聞いて思う。そうだ、この夏はもう一度ときめいてみよう。
忘れかけていたものを思い出すために。

EVENT REPORT SPECIAL

世紀を超えて、小さな物語を背負って歩こう

寺子屋トーク「ノストラダムスをぶっ飛ばせ！」に過去最高の二〇九名参加!!

あり得ない話と思いつつ、何となく気味が悪い、そんなもやもやした気持ちを吹き飛ばしてくれるかも知れない。そう期待したのは私だけでなかったのではないでしょうか。7月1日の第18回寺子屋トーク「ノストラダムスをぶっ飛ばせ！」は、209名と立ち見も出る超満員でした。

さてさて、どんなトークが飛び出したのか、参加できなかったみなさんのためにも、熱気あふれる会場の模様をリポートいたします。

（取材・文／吉崎　中）

◆　◆　◆

ニュースステーションも取材

当日（7月1日）は世界中で様々なノストラダムス関連イベントが開催されていたようです。そういう意味では、この“預言”なるものは一種の社会現象としてとらえることができるのでしょう。わが寺子屋トークにも、新聞やテレビなど数社が取材に訪れ、その日の「ニュースステーション」でもトークの模様が数十秒間報道されました。

でも、このトークのサブタイトル、「オウム、戒名、ボランティア」はどう“預言”と関連するのでしょう。思う間もなく、秋田住職の簡単な開会挨拶に続き、司会の臨済宗神宮寺住職の高橋卓志さん以下、4人のパネラーが登壇されました。

全員が、異なる宗派のお坊さん。このメンバーがどんなトークを繰り広げるのか、会場の全員が興味津々、期待感もどんどん高まります。



圧倒的な迫力のトーク

高橋住職の神宮寺は長野県にあります。冒頭、松本サリン事件や信州大学での脳死臓器移植といった話題を上げ、そのすさまじい報道の中で非常な苦しみを受けた人々の存在があったこと、そしてその苦しみに仏教は何も応えられなかったのではないかという自戒の念を語られました。

そして、現代社会をどうとらえるか、それに仏教はどう応えるかが本日のテーマであり、この大きなテーマの切り口として「オウム、戒名、ボランティア」というキーワードに沿って進めることを示されたのです。

この切り出しがとても大きな意味を持っていることに、恥ずかしながら私はすぐには気が付きませんでした。まだまだ、この3つのキーワードがどのように重なるのか、判らなかったのです。

さて、トークの方は開始早々からヒートアップします。前号のサリュでも紹介されていますが、4人のパネラーはそれぞれ、新しい仏教文化を模索し、熱心な活動を続けている気鋭の僧侶ばかりですから、具体的な活動事例を元に、どんどんトークが進んでいきます。

ミナミで「ボーズバー」を開いている清史彦さんは、今の寺は、寺本来の機能であるコミュニケーションができていないと問題提起し、市民と語り合う喫茶店「BONZE CLUB」を開いている杉若恵亮さんは、仏教の形骸化に対する危機感を述べられました。

インターネットの研究でも一歩先行く竹内純照さんは、アイデンティティを求める若者に、教団としての仏教では限界があることを示し、常にユニークな活動で注目されている法然院の梶田真章さんは、機能分化が進んだ社会の中で、住職ができることから始めることの大切さを説かれます。

ここにその一部でもトークの内容を再掲したいのですが、司会の高橋さんを含めた5人のトークは、それぞれに鋭い切り口で現代社会の問題と仏教側の問題を指摘していくものであり、圧倒

されているうちに第1部が終わっていたというのが正直なところです。

会場からの質問に湧く

あっという間に第1部が終了し、10分間の休憩の合間に、各パネラーへの質問票の受付が行われました。

この形式は、私個人としてはよい方法だと思われます。なにしろパネラーの迫力がすごいので、一般的な挙手による質問受付の進行ではなかなかうまく言葉にできません。文章の形で認めることにより、より自由な質問が行えると思います。

第2部は、司会の高橋さんが質問票を素早く整理し、内容をまとめながら各パネラーに回答を求める形式で進行。「ボーズバーはどこにあるのですか?」といった楽しい質問から、「仏教に自虐的では?」といった辛口の質問まで、高橋さんの手際よい進行も相まって、会場に一体感が生まれていきます。

そこではっと気がついたのですが、質問者はみな一様に、何かを教えてもらうこと、この混迷する現代社会の具体的な指針を求めているのに対し、パネラーのみなさん、親切にアドバイスは授けてくれますが、最終的には「自分で気付くこと」が最も大切だと説かれているのです。



オウムの問題は、オウムに絶対の帰依を誓った若者の行動に起因しています。戒名の問題も、本来は自分が欲しければ授かり、いらないと考えるのであればなくてもよいものでしょう。何かに頼りすぎ、思考停止してしまうことの危険性、それこそがこのトーク全体を通して語られている“大きな問題提起”なのではないでしょうか。

大きな物語の終焉

現代社会は“大きな物語”が崩壊した時代といえるかも知れません。国や特定宗派の教団という漠然としたシステムでは、私たちの抱える問題を解決する事はできないのかも知れません。一方、地球温暖化を始めとする環境問題などは、国や宗派といった立場を越えて地球の全員が考えなくてはならない問題です。

何かに頼ることは思考停止と同じです。ノストラダムスの“預言”に騒ぐこと自体、何かに頼ろうとしている弱さの現れなのかも知れません。

ならば、自分ができることから少しずつ始める。「ボランティア」がこのトークのキーワードとして示されていたことの意味が、ようやく判ってきたような気がします。

2時間を越える内容の濃いトークはあっという間に終わっていました。

それぞれに活動を続ける5人のパネラーから、ずいぶんいろいろなことを教えてもらった満足感が広がります。参加できなかった方のために、その言葉のいくつかを紹介したいとも考えていたのですが、紙面も尽きてしまいました。

私たちはそれぞれに、小さな物語を背負って「生きて」います。何か大きな物語に頼っているのでは、その人は本当に“生きている”とはいえないのかもしれません。難しい問題や複雑な社会にも、自ら考え、そして語り合い、できることから行動していくことの大切さ。ささやかながらも、小さな自分の物語を背負って「生きて」いきたい。つたない感想ですが、この一言が、このトークに参加した私の思いです。

「こころの教育」に大切なことは…　第17回寺子屋トーク

去る6月11日、教育学博士・伊藤隆二さんによる第17回寺子屋トーク・「大いなるものに生かされる～幼児期からの心の教育～」が開催されました。参加者は60名。

伊藤さんはホリスティック教育の視点から、知育偏重の教育に疑問を投げかけておられます。最近になって「こころの教育」が叫ばれ、多くの人がその必要性を感じていても、「こころ」を教育するためには「いつ、なにを、どのように」すればいいのか、具体的な手立てが見つかっていないというのが現状でしょう。



伊藤さんのもとには、わが子をよりよく育てたいと思う親が相談にくるそうです。「わが子とはいえ、この世に生を受けたのは“大いなるもの”のはからいであると、どれだけの親が自覚していることでしょう。『～させよう』と思うのではなく、もっと親が謙虚になる必要があるのではないでしょうか。教育には“モデリング（＝良いモデルを示すこと）”と“アトモスケアー（＝家庭の中に漂っている雰囲気）”の2つがもっとも重要なのです」と伊藤さんはおっしゃいます。

また、「芸術も宗教も、こころの次元のもっとも人間らしい営みですから、それらが教育と深いところで一つになることが、人間性を育む上で欠かせないでしょう」と芸術教育・宗教教育の必要性を話されました。そして引用された、「スピリチュアリティを抜いた知恵の教育は知恵の悪魔を育てる」というガリレオ・ガリレイの言葉に、参加者も考えさせられたのではないでしょうか。（川井田祥子）

《'99年度市民活動サポート事業》始まる!

お寺をボランティア活動の拠点に 市民から始まる地域文化の胎動!

ふたつのサポート団体の代表が語る それぞれの取り組みとこれからの展望

いよいよ倶楽部の主催する市民活動サポート事業が動き出しました。今年度の対象となった「まんまくらぶ」、「夕陽さんさん(sun sun)の会」とともに、これからどのような活動が創りだしていけるのか、とても楽しみです。

「まんまくらぶ」代表の田上真里さん、「夕陽さんさんの会」事務局長の森田道太郎さんに、それぞれの取り組みなどについて語っていただきました。

◆　◆

■現代の家庭生活を見直す

――まず、それぞれの団体が発足した経緯をお聞かせください。

森田「『夕陽さんさんの会』は、当初は同好会の形でスタートしました。現在事務局次長である野村さち子さんの経営する割烹『今昔』に、常連客の人たちがミニサロン的にいつも集まっていたんですよね。そこで、我々大阪の文化をもう一度見直そうという声が上がった。大阪には、夕陽ヶ丘という地名も残っているように、歴史的な夕陽の名所がありました。

夕陽には、『夕焼けを見てカラスが鳴いたらお家へ帰る』というように、家に帰りたいなとか、お父さんお母さんと話したいなという郷愁の気持ちを持たせる力がある。つまり、家庭の暖かさの象徴ともいえます。いわば、夕陽を通して家庭生活、ひいてはコミュニティの再生に結びつくのではないか。

さらに話を進めていく中で、夕陽をただ見るだけではなく、夕陽に関する古来の伝承や芸術、宗教など、文化面からも掘り下げられるし、さんさんと輝く夕陽は、自然との共生や環境問題とも結びつく、というように、幅広い活動ができそうだ、と思ったわけです」



▲まんまくらぶの定例会の様子。互いの悩みをうち明け、共有することで、自分自身の気づきにつながる。

田上「私たちまんまくらぶは、NPO法人である関西こども文化協会の事業のひとつとして、会員が自分たちの要望を形にしてできたものなんです。

私自身、子育てをする中ではいろいろと悩みがあります。そのことについて、母親同士が話し合える関係があれば、もっと楽になるんじゃないかと、親しい人たちと話していて、協会のスタッフの方に『ぜひそのつぶやきを形にしてみたら』と声をかけられた、というのが発会の始まりです。



▲田上真里さん

それがきっかけで、同じ思いの人たちと『おとなもこどももありのままに』という願いを込めて、まんまくらぶと名付け、今年の4月にスタートしました。とてもなじみやすい、すてきなネーミングだと思っています」

■人と人とのつながりを求めて

――現在はどのような活動をしていらっしゃるんですか。

森田「同好会時代の一年間は、宗教学者の山折哲雄先生の『夕陽と日本人』の講演会、一心寺の高口恭行住職による夕陽ヶ丘についてのお話、天王寺界隈の史跡仏跡巡りなど、まずはみんなが集う催しを開いてきました。集いを重ねて、機が熟した今年の2月に、正式に会として発足して、会員を募ることになりました。

正式な会として初めての取り組みは、7月末までを公募期限として、『夕陽』にまつわる絵手紙と一行詩を募集しました。なんと現時点で250点もの応募がありました。8月には入選作品を決定しますが、その作品は、應典院をはじめ、北御堂、大阪中央郵便局、舞州野外活動センターに順次展示する予定です。



▲森田道太郎さん

今は、とにかく会の名前を周知してもらうことに重きを置いています」

田上「まんまくらぶのメンバーは現在17人、月に1回、テーマにそって話し合う定例会を持っています。

今年の4月から始まりましたが、回を重ねていく毎に、自分のことをもっと知ってほしいというその人自身の姿が見えてきました。母親としてだけではなく、ひとりの人間として自分を考え、悩みを共有しあえる場になっています。

私たちは、決して専門家ではない、同じ立場の者同士が話し合うことを大切にしています。広報が行き届いて、見学希望の問い合わせが多いんです。見学希望者には、交流会に参加をしてもらって、それぞれの地域でまんまくらぶの精神を伝えてもらえたらと考えています」

――今後、考えられている事業についてお聞かせください

森田「11月13日には、大阪城から落日を見る会を企画しています。大阪城館長のお話を聞き、その後天守閣から夕陽を眺めるという趣向です。また、1999年末と2000年始にかけて、舞州の『新夕陽ヶ丘』から、夕陽と朝日を同時に見る会も予定しています。隣接する野外活動センターのログハウスを一泊お借りして、1年の終わり、そして始まりをともに迎えようというわけです。

来年の1月以降の予定としては、できれば應典院の場を使って、集まる機会を持ちたいと考えています」

田上「これからの事業計画の中で、特に力を入れていきたいことは、9月にあるファミリーキャンプです。ファミリーというのは、家族だけではなく、もっと大きな意味で捉えています。経験をともにしながら、子どもと大人がどんな関わりを持てるのか。



▲夕陽さんさんの会、昨年の一心寺での集まり。夕陽に郷愁をもつ老若男女、多数が集まった。

また、11月には、『カプラ』というフランス製の数千個単位の積み木を使ったワークショップを應典院で行います。子どもと一緒に大人がどう遊べるのか、遊びを通しての関係づくりを考えていきたいと思っています」

■應典院をネットワークの拠点に

――最後に、将来的な展望をお聞かせください。

森田「できれば事務局会議を應典院で開いて、情報の発信基地としてネットワークを広げて行きたいと考えています。同好会の形から発展したものですので、何でも取り込んでいける柔軟性があります。

それから、面白いイベントなどをするには、会員だけで企画していくには限界がありますので、間口の広い特徴を活かして他のところと接点を持っていきたいと思っています。同好会のような、やわらかい連合体としてできてきたものが、次第にその発信力を発揮して、周囲を自発的に巻き込んで行く形がいいと思いますね」

田上「次年度は、また新しくプログラムを作ります。自分にとってまんまくらぶが必要だと考える人が自然に集まればいいなと思います。今のところ、まんまくらぶは、東住吉が拠点となっていますが、それが市内全域、府内全域に広がっていけばいいと考えます。

子育てサークルというと、親子での交流、活動をイメージされるようですが、まんまくらぶは、子育てを通して自分の生き方を問い直す機会の提供を目的としています。まんまくらぶの理念を柱にし、地域に応じたグループが各地にでき、ネットワークを作り、日頃の活動の交流や、子育て学習会をやっていきたいと思っています。そのネットワークの拠点として、應典院があればいいと考えます」

――ありがとうございました。



▲対談に参加された両団体の方々。

CLUB TPICS

今一度お願いします!!

新しい市民文化の創造の担い手としてぜひ会員の継続を!!

前号のサリュに、5月から8月に会員更新期を迎えるみなさんに、新年度の会員継続のご案内を同封しました。

会員継続のご案内を差し上げた方は189名。それに対し、現在更新手続きをいただいた方は、101名(約53%)です。

総会資料の通り、今年度の予算では、前年度と同様の会費収入を計上、つまり会員数の現状維持を、最低限の目標としていますが、その達成が非常に厳しい状況に感じます。

今号のサリュには、前回ご案内した方で、まだ更新手続きをしていただいていない方、そして9・10月に更新期を迎える会員の方にも、会員継続のご案内を同封させていただいています。

今年度からの新しい試み、市民活動サポート事業もスタート、秋のコモンズフェスタ、年明け早々の舞台芸術祭の準備も着々と進んでいます。

それらの活動を通じて、会員のみなさんと共に、新たな市民文化を創りだすこと、それが寺町倶楽部の今年度の目標です。

ですから、会費に見合う"サービス"を会員のみなさんにお返しすることはできませんが、新たな市民文化を創造する担い手として、ぜひさまざまな活動に主体的に参加していただきたい、それが事務局の願いです。

過去ともに活動した団体やサポート団体など、他団体とのネットワークを強化し、今後は広く、深い活動を展開していきたいと考えています。3年目の今年度は、その基盤づくりの重要な時期です。

今後の活動を活発化させるためにも、金銭的な基盤は一番大切な部分。倶楽部の活動を支えるために、現在会員のみなさんが、継続していただくことはもちろんですが、多くの方に呼びかけていただき、寺町倶楽部会員拡大にぜひご協力をお願いします。

VOICE ボイス

今回のVOICEは、第18回寺子屋トークにご出演いただいた梶田真章さん。梶田さんは、京都の浄土宗系単立・法然院の若き貫主さん。境内の自然環境を生かした環境学習会などの活動をすすめ、またアーティストに積極的に寺を開放し、人と人との出会いの場としての寺の可能性を探っていらっしゃいます。



7月1日の寺子屋トーク「ノストラダムスをぶっとばせ!」では、いろんな活動をしている僧侶が集まって、それぞれの仏教者としての信念を語られたので、私自身学べました。また、観客の方々も熱心に聞いてくださり、よかったと思います。

私が住職を務める法然院には、さまざまないのちの営みがあります。ここに来られる方たちにとって、普段自分が考えている見方と違った視点で、自分と周りのいのちの関係を見つめていただける場になればいいと思っています。

大きな時間や空間の感覚の中で自分をとらえ、何億年という単位の中で、私のいのちというものの存在意義を感じる。私は、寺というもの自体が、自分を振り返る場であり、人と人との出会いの場であると考えています。

法然院とは対照的に、應典院は大阪の真ん中にあります。人々が会社の帰りがけに寄れるという特性を活かした、法然院とは全く別の可能性が幅広くあると思います。

應典院の活動は、あまり焦らず、肩肘張らずにそのままでやっていかれればいいと思いますね。今はまだ、世間的には突出した感がありますが、こういった寺があちこちに増えていけばいいと思います。

寺町倶楽部の活動には、あまり参加することもできませんので、私を含めて、会報を楽しみにしている人の視点を活かすような、参加しやすい雰囲気づくりを心がけてほしいですね。

秋田住職発 應典院掲示板

本格的な夏到来、それを追うようにお盆の季節が巡ってきます。お盆は、ご先祖さまがあの世からお帰りになる、仏教の年中行事。恒例の民族大移動もあって、日本の一大イベントでもあります。

お墓参りに仏壇のお祀り、僧侶の棚経にお施餓鬼、盆踊り等々、まぁ8月はご先祖さまのお世話で大忙し。合理と効率を重んじてきた近代大国ニッポンの、霊性ゆたかなもうひとつの素顔です。

目に見えないものの中に真実がある、とサン・テグジュペリは言いました。この季節、自分とは違う存在に思いを馳せる、いい機会にしてみれば。

◆ ◆

ボランティア学会で発表

去る7月10日、奈良の帝塚山短期大学で開催された第2回日本ボランティア学会で、記念シンポジウムに住職が出講、應典院の取り組みについて報告をしました。

学会の理事である、(財)たんぽぽの家の播磨靖夫理事長がコーディネーターとなって、医療系NGOのCOMLの辻本好子さん、全国老人給食協力会の平野眞佐子さんらと、「生命を支えるネットワーク」について議論を展開しました。時間不足で、消化不良の感がありましたが、住職としてはさらにこのテーマを掘り下げていくつもり。よい機会を与えていただきました。



議員インターン、盛況

去る7月19日、應典院で昨年に引き続き「議員インターンシップ'99」が開催、20代から30代の若手国会議員、市会議員など約20名が、フロアに集まった大学生と熱心な議論を交わしました。この制度、とかく不透明なイメージで語られがちな政治家も職業のひとつとして、体験を通じて職業選択の幅を広げようというもの。社会勉強の枠を超えた、新鮮な体験に、学生も受入れ先の議員も互いに刺激されるものが大きかったようです。

余暇学会で発表

秋の研修シーズンで、住職の出講の機会が増えています。9月18日には、大阪・弁天町市民学習センターにて「日本余暇学会研究大会」の記念講演を担当、余暇学なる分野でもこれまでの消費型レジャーから社会的余暇へ変化があるそうで、應典院の取り組みについて学者さん相手にお話します。また、それに先立ち、9月5日には、東京で開かれる芸術とヘルスケアフォーラムの分科会「コミュニティとアート/人をつなぐ、地域をつなぐ」にも出講、ほかに仏教教団の研修会が二つあるなど、席を温める間もない秋となりそうです。

イベント文化を考えるトーク

去る7月22日、應典院にて雑誌上方芸能主催(應典院協力)の「イベント・文化仕掛け人学校・企画発表市」が開催、プログラムのひとつ「文化をプロデュースするとは」に、トリイホールの大谷燠さん、上方芸能の加藤敏躬さんらとシンポジウムに参加しました。参加50名(写真上)。



当然話は、なぜ應典院でイベントなのか、今日イベントとは何か、という論点になるのですが、人と人をつなぐための「場」づくりというところで3人が一致したのが印象的でした。

トークサロンと念仏会お知らせ

恒例のトークサロン、秋から少しスタイルを変えて、毎回身近なゲストを招きます。前半はゲストのお話、後半をみんなで話し合います(水曜は19時、土曜は14時開会)。

9/8(水)、10/2(土)、10/6(水)

また、お彼岸の念仏会は、9月19日14時から催します。お念仏と住職のお話。志納制。

学級崩壊を考えるシンポジウム

深刻な社会問題となりつつある学級崩壊。この状況を打開すべく、さまざまな教育改革が全国で取り組まれていますが、今後の学校のあり方を巡って、去る7月20日、應典院にて教育シンポジウムが開催されました。

「学級崩壊克服への道」と題したこの催し、ふたつの話題から成り、「米国の少人数学級」について、奈良教育大学教授の八尾坂修さんから、また地域を挙げて学校改革に取り組む福島県三春町の実践について現職教員である本田広行さんが、それぞれ報告をしました。コーディネーターは和歌山大学教授松浦善満さん。

学級崩壊の問題は、同時に日本の学校システムの崩壊を意味しているといわれますが、それを実践面から解明する点でたいへん興味深いお話が聞けました。ただ公文化に対する市民レベルの活動や議論が未成熟な日本人にとっては、まだまだ課題の多いところではありますが。たいへんな豪雨の中、約50名の参加がありました。関西子ども文化協会と應典院の共催。